| | 【全身状態】 | 【病態の位置】 | 【病態の情勢】 | 【病態の性質】 |
|---|---|---|---|---|
| 《八綱》 | 陽 | 裏 | 実＞虚 | 熱 |
| 《病因病邪》 | | | | 気滞・瘀血・内熱<br>湿 |
| 《気血津液》 | | | | 血熱　やや血虚 |
| 《臓腑》 | | 肝・女子包 | | |

# 弁証論治

【弁証】肝火上炎、血熱、内湿

【病機】素体：内湿

- 肝気鬱結⇒肝火上炎⇒血熱
  ⇒瘀血

【治法】疏肝清熱、涼血、化瘀

【処方】竜胆瀉肝湯加減

竜胆草6g　山梔子6g　黄芩8g　柴胡6g　地黄8g
当帰5g　木通6g　車前子5g　沢瀉6g　牡丹皮8g
桃仁6g　甘草4g

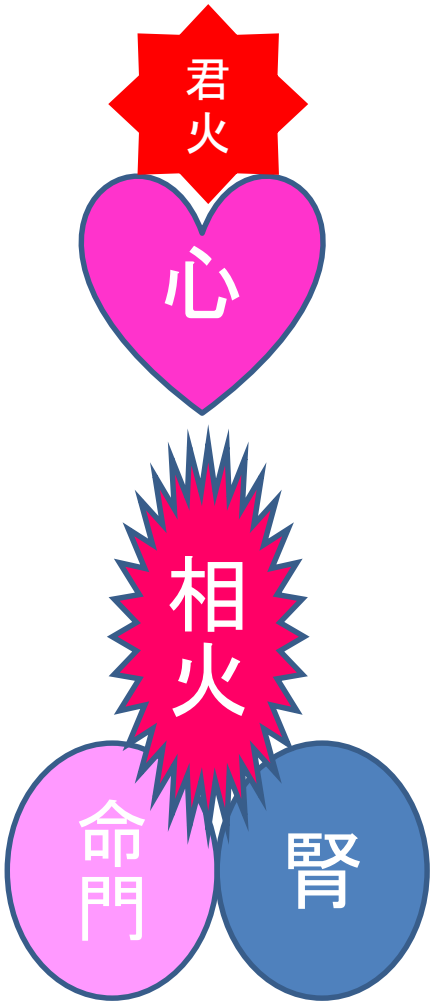
# 加味逍遥散の歴史

- 逍遥散は和剤局方（北宋）に初めて出てくる。
- 元・明・清代に非常に多様された処方
- 肝気鬱結に使用する処方の基本の形

　疏肝薬+補血薬+脾胃の薬

　四逆散：補血薬が芍薬だけ、胃に働く甘草と枳実であり、複雑化した病態には向かない。

# “相火論”

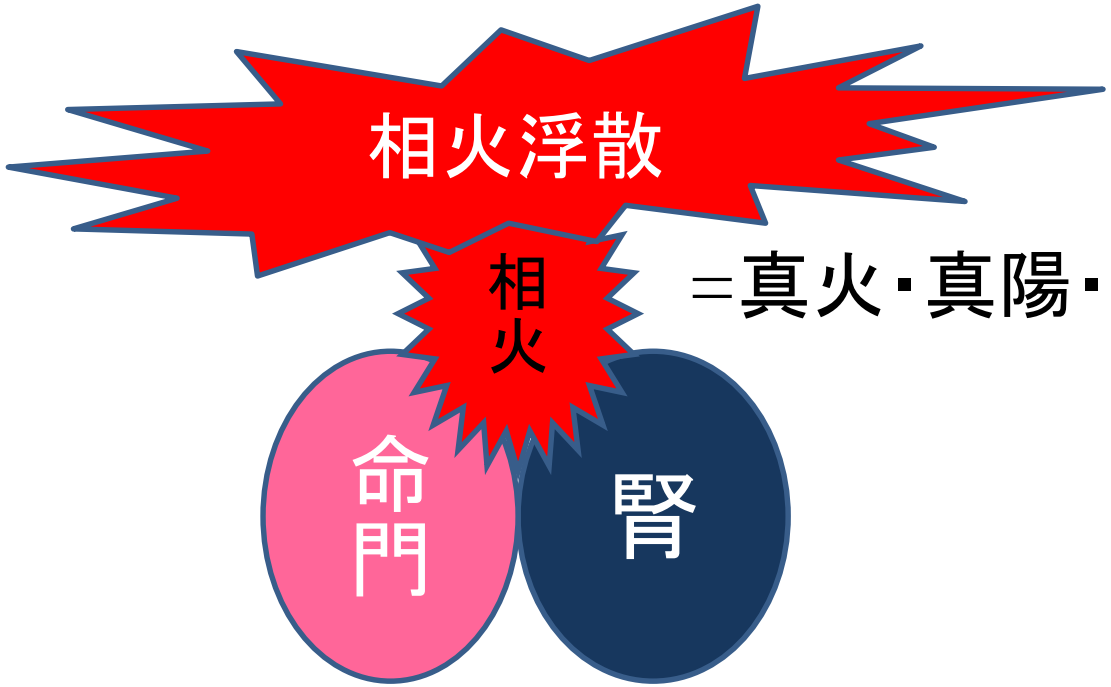



- 心に宿り主に意識の清明さなどにかかわり、全身を統括する「君火」
- 腎・命門に宿り「君火」の命令のもと、実際に身体活動を支える「相火」。
- 相火は暴走し、邪的な性質を帯びることもある。
- 南宋代より医学に導入され、議論の中心を担うこととなる。

# 相火論の流路

# “命門相火説”

南宋代よりみられ明代薛己・趙献可により確立される。




＝真火・真陽・元陽

相火を“難経”で根本的生命力が宿る“命門の火”として規定

→相火は“瀉す”対象ではなく、相火の暴走の原因である腎（命門）の陰を補うことで抑制する。Cf. 滋陰降火法

→相火を補う概念が生まれる

→相火が衰えることでかえって相火が浮散する病態が認識された